

## 六高由来の講堂から大講堂へ



上の写真(左)の正面が六高由来の講堂。昭和29年2月、新講堂(大講堂)建設のため解体された。上の写真(右)は完成間もない大講堂。

右の写真は、昭和33年から38年までの卒業アルバムに掲載された全景。正門を入ると本館正面玄関。そこを抜けると大講堂。校舎配置の主軸線となっていた。

## 大講堂行事

大講堂では、入学式・卒業式をはじめ様々な行事や集会が行われた。



写真(左)は卒業式。2階席は管弦楽団。写真(中)は文化祭スペシャルステージ。写真(右)は、創立130周年記念イベント「ホームカミングデー」(平成16年3月27日)。中山善弘先生の講演「校歌応援歌作曲秘話」の後の校歌大合唱。

## 創立記念講演

昭和29年11月21日、「創立80周年記念式典および講堂落成式」が完成間もない大講堂で挙行された。この日の記念講演は東京都知事の安井誠一郎氏(明治42年卒)と九州大学教授の和栗明氏(大正5年卒)。それ以降毎年、多くの講演会が大講堂で開催された。今号では近年のお二人の講演をご紹介します。

### ◆創立118周年記念講演(平成4年11月21日)

高畑 勲氏 昭和29年卒(平成30年没)

#### 「映画を作りながら考えたこと」



「『礼!』をしてもらうなんて初めてのことで…創立記念日の講演をするとは思ってもみなかったわけでして、大変光栄です」という挨拶から始まった。日本でなぜここまでアニメが普及したのかを様々な面から考察。一つは「何でも絵にして表す」という日本の文化。平安末期から鎌倉以降にかけて生み出された絵巻物は、「異時同図法」で一枚の絵に時間が含まれる。展開が実にスピーディーで面白く、まさにアニメーションと言える。浮世絵にしても題材の幅が広い。あらゆるものに好奇心を燃やして活写していく伝統が日本にはあった。二つ目は安く作ることができたこと。その要因として、3枚の絵で喋っているように見せられる日本語の口の動き(英語では最低8枚必要)、動かない絵を多用できる日本的な「止め」の文化(歌舞伎の見栄や殺陣の型)、「アフレコ」を可能にさせる日本語固有の性質を挙げて説明。「アニメという文化から遠いように見えるが、光の当て方によっては自分たちの文化の特徴をおさらいできる」と紹介した。

「火垂るの墓」など数々のアニメーションで知られる映画監督

### ◆創立133周年記念講演(平成19年11月21日)

大野美代子氏 昭和33年卒(平成28年没)

#### 「美しい橋を創る 一橋とデザイン」



アートが好きだったこと、父が技術者なので技術的なことも好きだったことから、大学ではその2つがうまく融合した分野である建築を学びたいと思った。しかし、父は「女の子だから、現場に行かなくても済むような、細やかなことをしなさい」というので、美術大学へ進み、建築に一番近い「空間デザイン」を専攻した。一度就職した後、スイスに留学したが、街並みの美しさや病院内部の美しさと心地よさに感動。帰国後、デザイン事務所を設立して、念願だった老人病院や精神病院のインテリアデザインを手掛けた。ふとした縁があり、「人々が使いやすい、生活の中の橋」としてデザインした歩道橋が、これまでにない発想であり、非常に画期的な仕事だと評価されて、土木学会の賞をいただいた。これをきっかけに数々の橋のほか、街路や地下道などを手掛けることになった。

講演では自身が手がけた橋と、世界の美しい橋を数々紹介。「皆さんには夢を持ち、まだ見ぬいろいろな世界を見て欲しい。新しい世界に美しい橋を架けて欲しい」と締めくくった。

横浜ベイブリッジなど数々の橋を手がけた橋梁デザイナー